

平成29年度第2回 北海道子どもの未来づくり審議会 議事録

日 時：平成30年2月5日（月）15:30～17:00

場 所：かでの2・7 1030会議室

開 会

【子ども子育て支援課 丸山主幹】

定刻になりましたので、ただいまから平成29年度第2回北海道子どもの未来づくり審議会を開催いたします。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます子ども子育て支援課の丸山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

審議会の開会にあたりまして、北海道保健福祉部子ども未来推進局 花岡局長からご挨拶を申し上げます。

開会挨拶

【子ども未来推進局 花岡局長】

子ども未来推進局の花岡でございます。委員の皆様には、大変お忙しい中出席をいただき、心から感謝申し上げます。

本日は、後ほど副知事の辻も出席する予定となっておりまして、その際に改めて、私も道側からのご挨拶をさせていただきます。

昨年8月と12月には子ども部会を開催いたしまして、富田委員に部会長を務めて頂き、「若者の保育士体験の機会を通して、子育て支援の充実を考える」というテーマに、17名の中学生と高校生が熱心に討議をしていただきました。

本日は、その内容を提言書の案として取りまとめましたので、当審議会としての提言の成案に向けて、委員の皆様方におかれましては、それぞれのお立場から忌憚のないご意見を賜りますよう、お願いを申し上げます。

本日はご審議の程、どうぞよろしくお願いいたします。

審議会成立宣言・日程説明等

【丸山主幹】

本日は6名の委員が欠席されておりますが、現時点で、委員総数15名のうち9名の出席をいただいておりますので、北海道子どもの未来づくり条例第27条第2項の規定に基づきまして、本審議会が成立していることをご報告申し上げます。

本日の配布資料を確認させていただきます。お手元に、会議次第、出席者名簿、事務局名簿、配席図のほか、資料1といたしまして「北海道の少子化に関する提言（案）」、資料2といたしまして「平成29年度第1回北海道子どもの未来づくり審議会子ども部会議事録」、資料3といたしまして「平成29年度第2回北海道子どもの未来づくり審議会子ども部会議事録」、資料4といたしまして「道の子どもの貧困対策の新たな取り組みについて」をお配りしております。不足等があれば、お申し付け下さい。

続きまして本日の会議の日程であります。次第にありますとおり、審議事項は「平成29年度子ども部会の審議結果及び知事への提言について」、報告事項といたしまして「子どもの貧困対策について」となっております。

会議の終了時間については、概ね5時を予定しております。なお、副知事は他の用務がございまして、4時頃こちらに到着する予定となっておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、本日の議事に入りたいと思います。これからの進行につきましては、松本会長をお願いいたします。

審議（1）

【松本会長】

本日は、お忙しい中お集まり頂きありがとうございます。ただいまご説明がありましたように、審議事項が1件、報告事項が1件となっております。

まず、「平成29年度子ども部会の審議結果及び知事への提言について」ということで、子ども部会の部会長を務めていただいております富田委員の方からご報告いただき、その後、質疑応答に入りたいと思います。それでは、どうぞよろしくお願い致します。

【富田委員】

子ども部会長を務めさせていただきました北海道社会福祉協議会の富田と申します。では、私から、計2回の部会の議論の様子も含めまして、提言の内容について説明させていただきます。

まず、資料1のページをめくって頂きまして、2ページをご覧いただきたいと思います。先ほどの局長さんのご挨拶でもご紹介頂きましたが、テーマといたしましては、「若者の保育士体験の機会を通して子育て支援の充実を考える」というテーマをいただきました。

提言をまとめる工程としては、例年どおり8月に第1回の子ども部会を開催して、その後の期間に各自で自己研究に取り組んで頂き、12月に第2回の部会を開催して、提言をまとめるという、例年と同じようなスケジュールの流れとなりました。

ただし、例年と違いましたのが、第1回の子ども部会におきまして、施設見学などを通じた幼児とのふれあい体験といったことが取り入れられました。ここが、例年と大きく違う点でした。今回の提言をまとめるに至った経緯の中では、この第1回目の体験を通じて、子ども達が実際に見て、ふれて、感じ取った事が、大きく活かされたのではないかと思います。

それぞれの部会の議論の様子ですが、まず第1回目の議論の様子として、お手元の資料2をご覧ください。

第1回は8月2日に実施をいたしました。集合して自己紹介をした後、すぐ体験に出発しました。帰ってきてからグループ協議に入り、そのグループ協議の結果を発表した際に、午前中に体験をした感想なども話してもらいました。

その一部をご紹介しますと、資料2の8ページをご覧頂きたいのですが、第1回・第2回通しまして、子ども達には3つのグループに分かれて討議を進めてもらいました。

まず、最初のグループの発表で体験の感想として語られたこととして、例えば「普段の子育ての大変な部分に関わる方から聞いて、知ることが出来た」、「子ども達と触れ合うことは楽しい、それを周りの人たちに伝えたい」、「子ども達とふれあえて、こういうことを守っていかないといけないとすごく感じた」、「小さな子たちがいない環境がいかにかたり前じゃないか、よく分かった」などといった感想が語られました。

生徒さん達が感じ取ったことから、このグループが議論をしてまとめたのが9ページの前半にかけての部分ですけれども、グループ協議の結果として、1つには、中高生が保育の仕事を経験し知ること、幼児とふれあう機会を設けることが非常に大切であるということ、それから、子どもを持つ親が充実して過ごせるまちづくりが必要ということ、また、そのために、ふれあう機会を得る施設とか、ボランティアの必要性、育児のための制度等の充実が必要といった意見に至りました。

体験を通して子どもとふれあう楽しさ・嬉しさを感じて、それをもっと多くの人たちに経験してもらいたい事と考え、また、体験を通して子育ての実情・現実というものを聞いたり、触れたりしたことで、いま必要なこと、自分たちの参加できることを考えてみたいと、子育てにおける環境整備という方向に議論が進んでいったようです。

こうした第1回目の議論を元に、第2回においては子育てにおける環境整備ということについて自分たちに出来ることを考えてみたいということで、このグループは第1回目の議論をまとめました。

そして、2つめのグループについては9ページの後半の部分ですけれども、まず体験の感想として、「外遊びの子ども達の元気がほほえましかった」といったことや、その一方で、「少子化の問題が深刻であると感じ取った」といった感想なども述べられています。

また、「幼少期にいろんな人たちと関わる経験がその子のコミュニケーション力に繋がる」など、子どもと色々な世代が関わることの必要性とか、そこから子どもの未来に繋がっていくと感じたなどといった意見も出されました。

そのほか、「幼児とふれあう機会をもっと他の人にも持ってもらいたいと思った。それが保育士を目指す人が増えることに繋がるのではないか」という思いを持ったとか、「素直に本当に子どもってかわいいなと思った」といった感想が述べられていました。

こうした体験を通じて、このグループがまとめていったのが10ページの部分ですけれども、第1回目のグループ討議では、子育ての難しさの一面として、お金の問題があるということを考えました。

親が働きやすい環境とか、保育環境の整備の必要性などに話が広がっていき、さらに地域の子どもへの関わりの必要性なども課題として抽出されました。

こうした子育ての実態を知り、小さな子どもとふれあうことの大切さを知って、いろいろと考え方を発展させていったのが、このグループの議論の特色でした。

最後の3つめのグループは10ページの後半の部分ですが、感想の部分をピックアップしますと、「保育現場の実情、子どもを見る仕事の重要性を感じた」といった感想や、「幼少期にいろいろな体験をすることの大切さ、そこに自分たちも何か出来るのではないかという思いを持った」こと、「小さい子があまり得意ではないと思っていたが、実際にふれあってみて小さい子ってすごくかわいいなと思った。子どもはあまり欲しくないなと思っていたが、自分も子どもを持ったら楽しいだろうなというふうに思うことが出来た」という感想、「今回の体験を通して、小さい子とふれあう機会・活動をいろいろな地域でも増やせるといいなという思いになった」ことですか、また、「いろんな世代で関わることの楽しさ、大切さ。子どもが元気に走っていたりすると、自分まで元気になってくる。このまま少子化が進んでいくのは寂しい」といった感想などが寄せられました。

このグループが体験をもとにして第1回目にグループ討議で議論してまとめていったの

が、ちょっとユニークな内容ですが、ふれあう、それから他世代・地域で連携することの大切さということに焦点をあてて、交流を深めるイベントとしての「お祭り」というものに着目してこのグループは議論を進めていきました。

そして、自分たちが出来ることとして、大人から子どもまで楽しめる祭りをつくっていくことということで、第1回目の議論の方向性をまとめました。体験を通してふれあう機会・活動の大切さなどを感じて、こうした方向に議論がまとめられていったのかと思います。

こうして第1回目の子ども部会におきまして、3グループそれぞれの議論を終えて、その後は第2回目までの間に、各自が普段の生活や授業の中でさらに調べたり、考えたりということを進めていただきました。

そして、第2回目を迎えて、さらに議論を深めていただきましたが、第2回目の議論の様子につきましては、お手元の資料3をご覧くださいと思います。

まずAグループですが、このグループは第1回目で子育てにおける環境整備という方向で議論しています。第2回目のグループ協議におきましては、子ども達が充実して過ごせるまちづくりのためのボランティア活動、子育てに関わる手当の充実というところに焦点をさらに絞って議論を進めました。そして、その議論の結果出てきたこととして、今の子達らしい意見ですが、SNSを活用して同じ思いの仲間を集めて、ボランティアとして関わり、また、そうした仲間を集めることで自分たちに出来ることとして、情報を広めて募金や地域の取組に繋げると言うこと、地域のイベントへの他世代の参加を通してふれあうということに繋げていきたいという意見にまとまりました。

また、次のグループは、第1回目で他世代のふれあい、地域の連携ということから祭りの企画という方向で議論をしましたが、第2回目のグループ討議におきましては、議論を通してその方向性を大きく発展させていって、普段の地域での取組について情報交換をしていきました。

それぞれの地域での取組を通してグループ内で情報交換をする中で、学校に空いている教室が多いという実態に気づき、それを活かして保育が出来ないかというアイデアに至り、そこで自分たちも子どもに関われる、また、関心のない生徒にとっても子どもにふれあう場になるとか、小さな子どもにとっても多世代でふれあうことで心の成長につながる、そして、このふれあい経験を通して、将来子どもが欲しい・保育士を目指そうと考えるきっかけにもなるのではなかと考えました。学校の空いている教室を保育所のように使っていくことで、そういう効果を生めるのではないのかと、そういう意見に考えを発展させていきました。

学校の空き教室を保育施設にしていくことは、制度の枠などを考えますと、すぐに実現できるアイデアではないのかもしれませんが、子ども達なりの視点で今回体験したこ

とから感じ取って、今自分たちが置かれている環境の中で自分たちが出来ることとして考えていった結果、高校の空き教室などを使ってそこに保育所を合体させるというユニークなアイデアに発展していきました。

制度の枠などを気にしない子ども達ならではの斬新なアイデアとも言えるんですが、こうした高校などの空き教室と保育所を合体させることで、高校などの生徒達が子どもに関わり子どもに関心を持つ、また、小さい子どもと高校生が関わることで、多世代でふれあうことで心の成長に繋がったりとか、そういうふれあいを通して、将来子どもが欲しい、保育士を目指そうという考えに発展していけるのではないのかと考え、アイデアをまとめていったのが2つめのグループでした。

また、最後のグループは、1回目の体験を通して子育ての実態や小さな子どもとふれあうことの大切さを知って、親が働く環境や手当のこと、地域の環境づくりですとか、いろんな考えを発展させていったグループでしたが、2回目の議論のまとめとして、地域の関わり合いということにさらに焦点を絞って、更に学校の授業という部分にも焦点をあてて議論を進めました。

このグループは、第1回目以降、自己研究をじっくりやった生徒さんもいて、そちらについては資料3に2例ほど発表されたものが載っておりますので後ほどご覧になってもらいたいと思います。グループ討議の中では、普段の授業の様子ですとかボランティア活動のことなどについて情報交換をする中から、このグループが意見としてまとめていきましたのが、若者が集う場所からきっかけ作りが始まるのではないのかということ、それから、地域の人の個々の取組だけではなく、行政や企業からの支援もあわせて地域づくりをしていくことが必要ではないかと、それが更には町おこしになるという循環を生んでいくのではないかという意見がまとまりました。

そこから更に議論を発展させて、もっと地域と学校が関わりあいを増やす必要があるだろうということや、若い世代の居場所づくり、SNSを活用した情報発信といったことに議論が至り、グループの意見としてまとめられました。

このように、今回3つのグループに分かれて、それぞれのグループ独自の方向性で議論を進めてもらいましたが、出てきた議論のまとめには、第1回目で体験して感じ取ったことや知ったことというものも、大きく作用したのではないかと思います。

ただ、この議論の結果だけでは、まだ焦点が広がり過ぎていますので、より凝縮させた結果として、提言は2つに絞られました。お手元の資料1に戻っていただいて、4ページをご覧くださいと思います。

2つに絞った1つめといたしましては、「学校活動で中高生と乳幼児が触れ合う機会を増やすことにより、若い世代が子育ての楽しさや、保育士など子育て支援に関わる仕事に興味を持つことかできる環境づくりを進める」というものです。

今回、子ども部会の中にあえて設けた保育現場で子どもとふれあう機会が参加した生徒さん達に与えた効果は、先ほど御紹介した感想や議論の様子から、皆様も感じていただけたのではないかと思います。こうした機会の必要性ということが、子ども達の議論の中でも再三繰り返されていましたので、これを1つめの提言項目といたしました。

次に5ページの2つめですが、「地域の中で乳幼児から高齢者までが交流できるイベントを開催したり、若い世代が集い子育てを支援するような場所を作ることにより、世代を超えて地域の全体で子育てを応援する」ということを2つめの提言としてまとめました。

今回の子ども達の議論の中で、多世代の交流の必要性ですとか、集う場の必要性、福祉で町づくりといった要素が出てきました。これらの要素というのは、私は社会福祉協議会の職員ですけれども、私たち社協の関係者が地域福祉の課題を取り上げるときに、よくこうしたキーワードがでてまいります。将来を担う子どもたちが自分たちの視点で議論する中で、こうした要素が出てきたことが非常に頼もしく思いました。

ただし、こうした集う場づくりですとか多世代の交流ですとか、こうした取組は子ども達だけに任せることではなくて、子ども達も参加して役割を果たしていけるように、背中を押して一歩前に踏み出すきっかけ作りは、やはり大人の役割だと思います。その環境づくりの大切さということも考え、提言の2つめの項目とさせていただきました。

それぞれの項目のねらいや手立てといったところは、生徒さん達の議論の中から出てきたものを抽出してまとめております。

提言項目1のねらいは、将来自分も子育てをしたいと考える若い世代を増やしたい、保育士や幼稚園教諭を目指す若い世代を増やしたいということにおきましましたが、これも今回生徒さん達が体験をして、子育ての大切さだとか子育てに関わる専門職の必要性ですとか、現場から感じ取ったものが凝縮された形になったのかなと思います。

手立てとしましては、グループ討議の中でいろいろと出てきた情報ですとかアイデア、そういったものをピックアップしてまとめております。

それから、提言項目2のねらいは、地域の人たちと顔見知りになり、みんなで協力して子育てを応援したいということにおきました。これも手立てとしては、グループ討議の中で出てきたことを凝縮するような形でいくつか並べております。

これまでの議論の結果の中で説明させていただいたことと手立ての部分は重なる部分もありますので、改めての細かな説明は割愛させていただきますが、今回は子ども達の感じたことを子どもならではの視点でまとめた提言になったのではないかと考えております。

こうした形で、2つに提言をまとめさせていただきましたので、ご協議をいただきたいと思っております。私からは以上です。

【松本会長】

ありがとうございます。大変よく様子が分かって、私も勉強になりました。今のご報告と提言書としてまとめた内容について、ご意見ご質問等ありましたら、よろしくお願ひいたします。

【山田委員】

今回の中高生の体験の受入れについて、私たちの団体の「子育て支援拠点てんてん」で行いました。その日は水曜日で、私たちの「子育て支援拠点てんてん」は乳幼児親子の交流の場を実施していない曜日だったのですが、2歳児のもりのようちえんを実施していたので、15名の2歳児を5名の保育者が連れて子ども達と一緒に森を探索するといったところに受入れを行いました。

それから、もう一つの体験の場所は、やはり地域子育て支援拠点の「ねっこぼっこのいえ」というところで、ここは、親子や地域の方達と交流できる場となりました。

中高生を受け入れてみて、学生自身の子どもと触れ合う経験や遊び体験の豊かさなどが、保育の中の2歳児とふれあうときに反映されてるなというふうに私たちも思いました。

最初から親しみを持って乳幼児と関われる中高生もいましたし、先ほど「自分は子どもを持たない」みたいなことをおっしゃっていた高校生もうちの方に来られてたんですけども、最初は子どもと距離を持って接しながら、その後だんだん子どもとふれあう中で、笑顔がみられていくというようなところもみられました。

中高生にとって乳幼児とふれあう機会はすごく少なかったと思いますが、2歳児にとっても中高生とふれあう機会というのはなかなか無いものですから、すごく良い機会になったのではないかと思いますし、その後何週間も「またお兄ちゃんお姉ちゃん来ないの？」という問いかけがあったりしました。

今回、地域子育て支援拠点と「もりのようちえん」活動の見学だったのですが、拠点についての説明とか、もしかしたらして下さっているのかも知れないのですが、いま報告を受けた時に、子どもとのふれあいが保育所や幼稚園にとどまってしまっていて、拠点の活用が認識されていないのかなというふうに思いながら読んでいました。

乳幼児、特に赤ちゃんとのふれあう機会がほとんど皆持てないと思います。私は札幌大谷大学の方で保育士養成とちょっと関わっているのですが、保育士を目指す学生さえも2年生になって赤ちゃんを抱く機会が、実習先で得られなければならないんですね。もっと地域子育て支援拠点子育て支援センターとか子育て広場とか言われている場を、全道にあるわけですからもっと活用していただいて、赤ちゃんとかのふれあいとか親子とのふれあいとかの視点を中高生に知らせたかったなというふうに思いました。

また、道の出前講師みたいなことで利尻高校や栗山高校に行って、高校生が子育て支援セ

ンターに見学に行く前の授業を1～2時間させていただいてるのですが、拠点のことをちゃんと知った上で行くと、学生もより学びが深くなっているように感じました。

なにより学生の視野も広がりますし、自分が親になったときにこういう所を利用できるんだなということも分かるのかなと感じました。

他府県とか他の自治体では、拠点がコーディネートして学生を拠点に受け入れるとか、親子に協力を呼びかけて小中高校に出かけて行って、毎月同じ子どもの育ちを見てもらうとか知らせるとか、そういうことがされていくところも多々ありますので、そうした先進的な取組も調べていただければ良いのかなというふうに思いました。

それから、全般に読んでみて、子育ての楽しみだとか子育て支援というものはあるんですけども、「子どもの育ち」っていうところが表現がないかなと思いました。子どもの育ちに向けて学ぶ機会が本当は必要だっていうふうに思うんですが、子どもそのものの存在とか育ちへの興味みたいなものを中高生が持てるっていうのが最初に前提にあって、その上で子育ての楽しさだとか子育て支援というふうな流れになっていくのかなというふうに思います。

4年前の横浜のニーズ調査では、4分の3の方が子どもとふれあう経験なく親になっています。ほとんど子どもとふれあう経験なく親になっている方が、4分の3ではきかないというふうに現場では実感しますので、赤ちゃんや乳幼児の育ちですね、子どもの育ちを学ぶとか知るとか興味を持つとか、それを入れていただいて、その上で子育ての楽しさとか子育て支援という表現をされたらいいのかなと思いました。

あと、保育士と幼稚園教諭で言い切られてしまっているのですが、子育て支援に関わる職種はそれだけではありませんので、「など」とか、多様な職種も想定できるようなふうに書かれてはどうかというふうに思いました。以上です。

【松本会長】

ありがとうございました。最後の「など」は文言のことですね。今のご発言でちょっと確認をしたいのですが、「子どもへの育ち」や「子どもへの関心」と言ったことを具体的にどこかに書き込むとか、そういった修正のご意見ですか？

【山田委員】

そうですね。ちょっと見ていたときに提言項目1のところ、若い世代が子育ての楽しさや保育士などの子育て支援というふうになっていて、2つしか提言になっていなかったの、若い世代がっていうところで、子どもの育ちの支援の視点みたいなものを入れたらいいのかなというふうに思いました。

後は発達を学ぶとか、後半の手立ての(1)の②のあたりだと、家庭科や総合的な学習の時間の中で絵本とかおもちゃをつくるというので、前段の中で当たり前のように発達を学ぶというのはあるのかもしれませんが、「子どもの発達を学び」とか入れられるところはいくつかあるのかなというふうに思って読ませていただきました。

学校の空き教室に関して、保育所というよりは、乳幼児親子と交流の場・広場・拠点というところが、割とそういう取組をされているところもありますし、取り組みやすいのではないかというふうに感じました。

【松本会長】

ありがとうございます。ご意見としては、保育所・幼稚園というところを、もう少し子育て広場や子育て支援というところにも広げるような形の書きぶりの方がよろしいのではないということと、もうひとつは、子育てと言うことだけではなくて、子どもの育ちそのものに注目する、関心を持つとか学ぶという文言をどこかに入れたらいいのではという2つのご意見ということで伺っていいでしょうか。分かりました。

このほか、ご意見ございますでしょうか。

【五嶋委員】

言いたいことは概ね山田委員がしゃべって下さったのですが、今回の提言を見ますと、保育所・子育て支援施設・幼稚園といったところに着目されてしまっていて、これは、単純に保育所を増やせばいいというような視点の提言ではないかというふうに私は捉えてしまったんですけども、これから少子化が進んでいく中で、保育施設と保育士を増やしていったら、結局人がいなくなってしまうたら、その施設がいなくなってしまうのではないかといたところまでが、ちょっと想像できていないのかなと思いました。

そういった保育所の運営の費用と、私たち子育て世代が求めている収入とのバランスを比較したときに、そのバランスが取れているのかということが疑問に思ったところです。

それで、こういった少子化の特徴について、部会の中でどのようにお子さんに説明されたのかなというところをお聞きしたいです。

【松本委員】

それでは、富田委員からお答え頂いてよろしいでしょうか。

ご意見についてですが、子どもさん達がまとめてきたということなので、ここで色々足すというよりも、こういうことがもし議論で出ているのだったら付け加えていくという形の整理が良いかと思っておりますので、今出ているお二人のご意見について、ご発言いただければなと思っております。

【富田委員】

今ご質問頂いた子育ての状況などの説明については、前年度の子ども部会の中では、現在の北海道の子育てを取り巻く環境や課題の説明の時間が設けられていましたが、今回は体験を含めましたので、私は体験には同行していなかったのですが、行った先でどういうお話があったというところは把握してないのですが、部会の全体の中では体系的な説明の時間は特に設けておりませんでした。どちらかと言えば、現場に触れて体験して頂くというところを重視させていただいたような形になったのかなと思います。

それから、提言の中に含めた方が良いのではとご指摘いただいた部分につきましては、事務局と相談しながらまとめていきたいと思いますが、個人的な意見・感想として言わせていただきますと、生徒さん達の議論の中で、空き教室を活用して保育所を作ったりですとか、保育所と合体という意見は出ていたのですが、たまたま議論の中で保育所というキーワードで進んで行ったところだと思いますので、アイデアの趣旨を考えていきますと、中高生などの若い人たちが子どもにふれあえる場として空き教室を使っていくという、そういう趣旨なのかなと思いますと、保育所と言葉を限定することなく、少し幅広く設定していてもいいのかなというふうに思いました。

また、子ども達の育ちの支援というところや子ども達の発達を学ぶと、そういう視点も必要ではないかというところでは、確かにグループ討議の中などでも、体験をしてみて、2歳児がこんなにしっかりしていると思わなかったとおっしゃった生徒さんがいて、その言葉を聞いて、普段本当に小さな子どもと接する機会がないんだなというのは、非常に私も感じました。

そして、生徒さん自身の経験として、自分が小さい頃にいろんな世代のお兄ちゃんとか大人に関わってもらったことすごいコミュニケーション力がついた、それが自分の今に繋がっているというご意見をおっしゃった生徒さんもいらっしゃいましたので、子ども達の育ちというように若人自らが関心を持つということも非常に大切ではないかと思えます。こちらも出していただいたご意見をもとに、また事務局さんともご相談しながら、より良い方向にまとめていけるようにしていきたいと思えます。

【松本会長】

山田委員から出たご意見については、議論の中にもそういった話があったので、そういう方向で調整をしたいということでした。

また、五嶋委員からのご質問については、今回は体験の方に重心をおいたので、講義の時間は取れなかったと言うことでした。

後はご質問などいかがでしょうか。こちらで付け加えていくと言うよりも、そういうことが子ども達の議論の中であつたかということの確認が主かと思いますが、もう少しこうい

う所があればなどといったご意見があればどうぞ。

【多田委員】

内容を見させていただいて、子育てに関して興味を持とうという視点から色々な意見が出されていて、すごく考えているなと思ったんですけども、その中で、保育士さんの個々の環境がとても厳しいというもの、経済的などが1番だと思うんですね。

私の業務の中で、20代・30代の人で債務整理の方もいらっしゃるのですが、その債権者の方の中に、奨学金に関する割合が、はっきり統計を取っていないんですが、半分くらいの割合にいるなという印象を持っています。

それで、生徒さんの中に、とても環境が厳しい中で働いているんだというような発表があったと思うのですが、そういったところは、どのくらいの議論があったのでしょうか。

【富田委員】

今回の議論の中では、その点で議論がもりあがったというところはないのですが、生徒さん達がグループの中でお話しされているのを横から聞いていて感じましたのは、午前中に現場に行って、そこで小さい子だけではなく、子どもに関わる支援者の方なども会う中で、そこに関わる仕事の大切さですとか、いろんな現場の状況を聞いて、非常に大変な状況だということを知ってきたことで、午後のグループ討議でそういった話題が出たのかなと思います。

前年度の子ども部会の議論の中では、奨学金の話ですとかそういったことを強く意見として訴えられた生徒さんもいて、自分の周りでも非常に奨学金だとか、将来の返済のことを心配しているとか、そういった声が前年度はでておりました。

今回は現場を見てきた感想として少しお話が出たのですが、どちらかというふれあう機会などの方に議論の焦点が大きく進んでいったので、ご指摘の所についてはあまり深い議論にまでは至らなかったというのが、当日の流れかと思います。

【松本会長】

その他、いかがでしょうか。

【五嶋委員】

2つめの提言の中で、「中高生がボランティアとして」というような文言があるんですけども、資料の中を見ますと、それ以外にも、ボランティアをしたい人たちが繋がるようなというような文言もあったかと思うんですね。

お子さんからそういった発言がせつかくあったというなら、そういったところも提言の中に加えていただけると、私も自分で団体活動する中でボランティアを集めるということが最近が多いので、そういったあたりも踏まえていただけると嬉しいと思いました。

【松本会長】

そのあたり、議論の流れの中でいかがだったでしょうか。

【富田委員】

そうですね、提言項目2の②のところの後半部分にもあるんですけども、SNSなどを使って共感し合える仲間を集めてというところと、もう1つ出ていたのが、子育てしているお母さんとか、そういう人たちも参加できるようにSNSで情報を発信したりなどという事で、生徒さん達も自分たちだけではなくて、集める仲間を非常に広く捉えていた印象がありますので、そういったものも生かせるように事務局とご相談していければと思います。

【松本会長】

お話を聞きながら思ったのですが、例えば多田委員からあった経済的な部分だとか、他にいくつかありましたが、提言では直接反映していないけれども、子ども達がいろいろ関心を寄せたことだとか議論したことが、他にもいろいろあると思います。それは富田委員の報告の中にもいくつか出てきていると思うんですね。

そういったことを、長々とではないのですが、提言の前の前文ですとか、そういうところでこういう風な話があったということを盛り込んで、その中でこの2つの提言に絞ったという形にさせていただくのはどうでしょう。

それが子ども達の議論の活かし方でもありますし、次年度の議論の仕方の参考にもなり、より活発な議論が出来るのではないかと思います。

お仕事を増やすようで申し訳ないですけども、そういう案はいかがでしょうか。

【富田委員】

今回の提言については、色々とグループで討議していただいたものを、凝縮して2つにまとめたというところですので、ご意見のあった部分については、事務局と相談しながら、記録などをもとに、盛り込める部分を検討させていただきたいと思います。

【松本会長】

様式については特にこだわらないです。前書きのところは、ここは会長名で出るみたいですが、そこが長くなってもいいし、それとは別に部会の様子といった形でもいいです。

形にはごだわりませんので、内容をもう少し反映させるようなことを整理していただいて、提言というふうに進めていただければいいと思います。

その他、いかがでしょうか。

【川島委員】

幼稚園協会の川島です。私は保育所もやっております、今日は他に保育所の方はいらっしやらないようなので、そちらの方も含めてお話ししたいと思います。

まずひとつは、非常に熱心に議論しているなということで、感心しました。昨年の今頃にもこういう会がありました。その中には、子ども達が実情を分かっていない、これは無理だというものもあり、今回も一部ありましたけれども、例えば高校の空き教室を保育所にとするのは、なかなか難しいのではないかと富田委員もおっしゃっていて、やはり、そういう所についてはちょっと無理かなという感じがしましたけど、今回は非常によく内容を議論しているなというふうに思いました。

その中で、少子化に関する提言ということなのですが、今の子ども達をどうしようとするのかという議論だったのか、もう少し出生数を増やそうということも含めての議論があったのかということ、ちょっとお聞きしたいなと言うことがひとつです。

また、保育士が足りないかどうかという問題も、処遇のことが一部書かれていましたけれども、処遇改善費というものが制度化されて、キャリアアップということもありまして、保育士等の給与が非常に上がってきております。ですから、そういうお金の問題はこれからクリアするのではないかと。この処遇改善が継続されれば、それほど処遇が悪いということにはならないと思います。

他の大手から比べると、やはり、幼稚園保育園の先生方の給料は安い、その割には仕事がきついということは、我々としては分かっていますけれども、そんなに給与が少ないということは少し改善されたのかなというふうに思います。

ただ、委員の先生方や子ども達がいろいろ議論していますように、保育士が不足してきているので、こういうふれあう機会などがあった方がいいのではないかとということについては大賛成で、現在も、国や道の考え方で、中学生あるいは高校生が、一部職場体験ということで私たちの所へ来ます。そういう時には、非常に素晴らしいということで是非なりたいたいという意見がでます。ご存じのように、子ども達が将来どのような職場で働きたいですかといった時に、幼稚園や保育園の先生になりたいというのが、大体女の子の3位くらいになるんですね。でも、これが年々減っていき、進学する頃になると本当にわずかな人たちになってくる。

やっぱり少子化の影響で、そういう仕事を希望する人が減ってきていることによって、思ったよりも職場がきついなということで、4分の1ぐらいの人たち、23%ぐらいの人が1年のうちに辞めちゃうんですね。これがやはり問題ではないかなというふうに思っております。

ですから、保育士コースを作ったらいいのではないかと提言もありましたけれども、介護士に関しても、高校では、今はそういう言葉を使いませんけれども、ヘルパー2級を高校在学中に取れるというような制度もありまして、そういう高校は非常に多いですね。

ですから、仕事のきつさはありますが、将来ずっと職場で働けるというような形にもって

いく事が大事なのかなというふうに思います。

それで、最初に話をしましたように、たくさん体験をなさいたいというすばらしい提言や意見もありました。実際に、この提言というのが、今いる子ども達をどうして育てようか、もっともっと立派な環境づくりをし、健全な子どもを育てようとする提言なのか、今後、少子化を解消するための工夫というのがどこかに記載されているかということが、ちょっと気になりましたのでお伺いしたいなというふうに思いました。

【松本会長】

どういう議論があったかというお話だと思いますが、富田委員いかがでしょうか。

【富田委員】

まず、今の子ども達をどう育てていくかということと、将来の少子化への対応というところでは、生徒さん達の議論を振り返ってみますと、その両方の視点を持って話されていたと思います。

午前中、現場に行って乳幼児達とふれあってきたことで、ふれあってきた子ども達のような今の幼児達をしっかり育てていくという必要性を非常に現場で感じ取って帰ってきたという印象がありました。また、このまま子どもがどんどん減っていってしまうことへの危惧というものも、生徒さん達の議論の中で非常に感じられました。

子ども部会に参加される生徒さん達を道の方で調整されるときに、事前に情報などは提供されていると思いますので、印象としては保育士が今足りないですとか、情報はしっかり持った上でグループ討議に臨まれていた様子もありました。なので、現状と将来、両方見据えて、いろいろ意見を出していただいていたのかなという気がします。

今も将来も、子ども達を育てる環境を作っていくためには、保育士さんなどの関わる専門職の大切さや重要性というものも、非常に体験などを通して感じ取ってきたようですので、なかなか議論の結果としてまとまった中には、はっきり出てきていないのかもしれませんが、生徒さん達も非常にそういう視点を持ってお話をされていたなというふうに私は感じております。

【松本会長】

ありがとうございます。今の点も含めて、議論の経過と言いますか、どんな話が出たかということ整理して頂ければと思います。

ただ、提言についてお願いしたいのは、我々大人から見ると、ああいう事も、こういう事もいっぱい話もあるのですが、子どもさん達の委員から見て、こんなことは話していないよとならないよう、そこの議論が反映されているといった形で整理して頂ければということです。ああ、こんな事もあったね、こんな事も話題になったねと振り返ることができるような形にさせていただけると、大変ありがたいなと思っております。

あとよろしいでしょうか。今回は論点をかなり絞った形で、体験も入れて、去年とやり方というか考え方を変えたと思うんですけど、その点についてはいかがですか。

【富田委員】

私は前年度と今回の2回しか参加させていただいていないのですが、より今回の方が自分たちの目線で自分たちが今できることという視点で、いろいろ議論していただいたのかなという気がします。

前年度は、前段で子育ての現状みたいな情報を得て、いろいろと北海道として取り組むべきではないのかなということ、中高生さん達と議論したというような印象があったのですが、それはそれでいい議論だったんですけども、今回は、より自分達の目線で自分たちが出来ることというようなところで、そこにベースを置きながら議論を発展させていただいたのかなというふうに思います。

私個人としては、今回のような形の方が中高生さん達の生の意見というようなところを感じ取れたのかなという印象があります。

【松本委員】

承知いたしました。それでは、この件については修正していただくものは修正していただいて、経過といたしますか、どのようなことが議論になったのか分かる文章をつけていただくといったことで、後はお任せいただくといったことでよろしいでしょうか。

それでは、いくつかの修正案があったということを前提として、お認めいただいたということにしたいと思います。

審議（2）

【松本委員】

2点目は報告事項です。子どもの貧困対策について事務局から報告を頂いて、皆様からのご意見とご質問を受けたいと思います。ではお願いします。

【子ども子育て支援課 佐藤主幹】

道の子どもの貧困対策につきまして、ご報告させていただきます。道では3年ほど前に子どもの貧困対策推進計画の策定の検討会議を設置いたしまして、家庭の事情で厳しい経済環境で生活した方や支援団体、松本先生をはじめとする有識者の方々から、貧困の実態や支援のあり方などのご意見をいただきまして、平成27年12月に平成31年度末までの5年間を計画期間とする子どもの貧困対策推進計画を策定しております。

北海道は、生活保護受給率やひとり親世帯の割合が全国と比べ高くなっておりまして、就労支援の充実や経済的な支援、教育支援の充実などが課題と考え、まず、全ての基礎となる相談支援の充実を掲げ、重点施策の柱として、教育支援・生活支援・保護者の就労支援・経済的支援の4つを掲げ、子どもの貧困対策を進めてきたところです。

道では、平成28年10月に、子どもの貧困対策をより効果的に推進するため、子どもの生活環境や学校・家庭での過ごし方などを具体的に把握することを目的として、札幌市と連携し、北海道大学と共同で「子どもの生活実態調査」を実施し、昨年その調査結果を取りまとめました。

ここからは資料4によりまして、調査結果の概要と道の新たな取組について説明をしていきたいと思います。まず、子どもの生活実態調査の結果について、計画の重点施策の柱と関係づけましてご説明いたします。

(1)相談の状況では、保護者自身や子どもに関する悩みを相談する相手がいないとする割合が父子家庭において高く、また相談機関の存在や相談方法を知らないとの回答が、ひとり親世帯で2割程度ありました。

(2)子どもの教育では、学校の授業についてわからないという割合が、年収が低い階層で高くなっております。また、大学進学希望につきましては、高校2年の子どもとその親にそれぞれ尋ねたところ、進学意向を示した割合は、子どもが親を約10ポイント上回り、親子間での意向の差が見られ、年収が低いほど、お金の心配を理由に高校までと回答している状況となっております。

(3)生活の状況では、母子父子寡婦福祉資金につきまして、ひとり親世帯や年収が低い階層の3割から4割の世帯が制度を知らないと回答しています。また、放課後や休日をひとりで過ごすとする子どもが2割弱おり、その割合はひとり親世帯で高くなっている状況です。

(4)保護者の就労状況では、特に母子世帯の多くは就労しており、その勤務形態を見ますと、早朝や夜間を伴うことが多くなっておりまして、児童扶養手当など公的給付を加えた世帯収入は、母子世帯の約7割で300万円未満となっている状況です。

(5)経済状況では、母子世帯の親の3割以上が赤字と回答し、その子どもにつきましても、同じ程度の割合で同様の認識を示しております。子ども自身も家計の苦しさを同様に感じている状況となっております。また、病院を受診させなかった経験がある方は、年収が低い階層ほど、時間やお金がなかったことを理由にあげる割合が高くなっています。

調査を通じまして、世帯の収入や家族形態が、子どもの日々の生活をはじめ、教育の機会や進学など、子ども自身の将来にも影響を与えかねない実情が数字上でも詳細に確認できたものと考えております。この結果を施策の推進に有益に活用するとともに、道民の皆様に広くお伝えする機会を増やしたいと考えているところです。

次に、道の新たな取り組みについて、資料の5ページ目より6点ほどご紹介させていただきます。

まず1点目は、効果的な情報発信です。調査の中では、福祉支援制度などを知らなかったとの回答があり、また、施策の情報を得る手段で最も多かったのが、学校からのお便りでしたので、福祉等の支援制度を、学校を通じて行き渡らせるよう、教育部門と連携して実施する準備をたいていただいております。また、ひとり親家庭に支援情報を適切なタイミングでお知らせできるよう、メールマガジンによる配信を始めております。

2点目は、貧困の状況にある子どもの早期把握と支援です。貧困の状況は周囲から大変わかづらく、見えない貧困という話も出ておりますが、かつ支援制度や相談先を知らなかったり、必要な支援に繋がっていないケースもあると考えられます。そこで、道といたしましては、貧困の状況を早期に把握し、支援につなげる方法を検討しております。

これまで、道では虐待予防の観点から、乳幼児検診や保育所・幼稚園の場面で、虐待の兆候などをチェックする「安全・安心ネットワーク」や「おや？おや？安心サポートシステム」というものを構築してございまして、このシステムで使っておりますアセスメントシートに、貧困の状況を評価・チェックできるような項目を追加するなどして、支援が必要であったり、心配なお子さんの情報を虐待事例と同様に、市町村の福祉部門や要保護児童対策地域協議会につなぎ、対策を講じていこうという考えを持っております。

資料の7ページは、子どもの安全・安心ネットワーク推進事業における切れ目のない支援と連携についての全体図で、8ページは、安心安全ネットワークで使っております早期発見の主なチェックリストです。これに貧困の視点を更に加えるなどの検討を行っていくこととしております。

また、9ページがおやおや安心サポートシステムで、保育所や幼稚園で気になる子どもの情報を行政に提供するようなシステムをやっております。10ページはこのシステムで実際に使っておりますサポート票で、同様に貧困の視点を加えていくこととしております。

3点目は、ひとり親家庭への就労支援です。ひとり親家庭への就労支援の強化について、道においては、母子家庭等就業・自立支援センターを道内6ヶ所に設置しまして、ハローワークと連携した職業あっせんなどを行って参りましたが、特に地方の支援を強化するため、各振興局に配置してあります母子・父子自立支援員が中心となり、センターとの連携を強化しまして、それぞれの管内の求人情報の提供を行い、ひとり親家庭の就職や適職につなげる取組を検討しているところです。

4点目は、子どもの居場所づくりの推進です。子どもが孤立することなく、気軽に集える居場所づくりは、重要な取組と考えており、道独自に、市町村の居場所づくりに対する支援制度を平成28年度に創設したところです。

また、最近では貧困に対する理解も浸透する中で、子ども食堂などの取組が広がっておりまして、道では、子ども食堂のスタッフの確保や食材の調達方法などの取組の実態把握を行うこととしております。さらに、子どもの居場所づくりを道内で幅広く展開できるように、先行事例の紹介などを行う手引の作成も進めているところです。

こうした取組を通じて、特に郡部など地方への展開を広げていきたいと考えております。

5点目は、児童養護施設退所者の自立支援です。施設を退所した後の進学や就職に伴う生活を支援する貸付で、返還免除の要件を盛り込んだものを、昨年度から実施しております。

最後の6点目が、子育て世帯の経済的負担の軽減です。保育料の負担軽減を独自に行っておりまして、国の制度に加えて要件を緩和しまして、第2子以降の保育料を全額無償とする取組を今年度から行っており、ほぼ全ての市町村で適用されております。

また、妊産婦安心出産支援事業というものも行っております。分娩できる産科医療機関が近くにない妊婦さんは、遠くまで移動したり、場合によっては宿泊したりなど、経済的負担も伴っております。こうした条件の方々に、交通費や宿泊料を助成する事業を昨年度から行っているところです。

以上が、道の新たな取り組みのご紹介でした。最後に、今後の発展としてお話しさせていただきます。道では、公的なサービスでは対応できない日常の身の回りの困り事を、地域住民で支え合って、その軽減や解消を目指す共生型の地域づくりに取り組んでいます。

具体的には、共生型の地域福祉拠点を設置して、そこに子ども達や障がい者、高齢者をはじめとする住民だれもが自由に集い交流する、そういった中からコーディネートする人材の支えのもと、住民相互の助け合いや、支え合いの活動に繋げるとともに、助け合いを通じて、必要な方には公的サービスが受けられるよう、関係機関と連携を図るなどの取組を行っていくこととしております。

こうした場で、子どもへの食事提供や、学習サポートといった取組も広がっています。この福祉拠点を31年度末までに道内全市町村に設置することを目指して、これまでに147市町村に設置されている状況です。

最後に、まとめになりますが、社会の主役となっていきます子ども達が、将来に意欲や希望を持って成長できる、そんな社会の実現に向けた地域環境を作ることが重要だと考えております。このため、道と致しましては、国や市町村とともに、施策の一層の充実に務めるとともに、地域住民の皆様にも貧困の現状をご理解いただき、地域の活動への参加や協力に繋がるよう、昨年12月には札幌市と北海道大学と共催で、子どもの貧困フォーラムを開催させて頂いております。こうした様々な機会を通じまして、貧困の現状をお伝えして参りたいと考えております。私からの報告は以上です。

【松本会長】

ありがとうございました。このご報告について、ご質問ご意見等ございましたら、お願いします。

【五嶋委員】

ご報告ありがとうございました。私はNPO北海道ネウボラという取組をしていて、そこ

では相対的な貧困ですとか、そういった目線からも、すべての子どもと家族という目線で支援をしていただきたいと訴えているところなのですが、頂いた資料を拝見しますと、やはり一部の家庭の支援にとどまるというのをお見受けするのですが、そのあたりは、今後具体的に何か考えられているのでしょうか。

日本というのは、貯蓄型の福祉社会になっておりまして、私ども氷河期世代で、NHKでもアラフォークライシスといった報道も先月くらいにあったと思うんですけど、貯蓄のない世代が、子どもを育てながら、実際に老後はどうしていったらいいかというところも踏まえて少子化対策をしていただかないと、子どもの数というのは増えないと思うんですが、いかがでしょうか。

【松本会長】

今のご質問は、おやおやサポートなどの支援はハイリスクの所に対応するもので、もうちょっと広い観点が必要なのではないかということによろしいでしょうか。では事務局からお願いします。

【佐藤主幹】

私どもの観点では、子どもが生まれ育った環境によって希望を失ったりチャンスを逃したりすることの無いよう、色々な環境で育つ子ども達がいて、子どもの貧困というのは結局、親の貧困ということもありますので、その視点から、色々な保護者の方を対象に、貧困の視点を持って取組を進めて行きたいと考えております。

ひとり親とか生活保護世帯、これらの方々は特に厳しい状況にある方々として例示しておりますけれども、そこに限定したものではないと考えております。

【松本会長】

いかがでしょうか。今後の進め方ということで、私からも1件あるのですが、今、五嶋委員からご指摘のあった点と関わって、おやおや安心サポートシステムに乗せていくということは一つの前進なんですね。ネグレクトというところで、経済的問題がからんでいるということに、どういうふうに対応していくのかという観点から一歩進んでいくんだらうと思えますし、現場でも対応・支援が難しいところを、経済的支援も含めて広げていけないかという観点になろうかと思えます。

ひとつ危惧は、やはり虐待というふうな形、ネグレクト家庭の支援ということで乗っていくことが多いと思うので、それは一歩前進だという評価の上ですが、母子保健だけではなくて保育所やその他の乳幼児がいるところに、きちんとこういう観点が広がっていった連携が取れることがとても大事だなということです。

もうひとつは、人口ベースでいきますと、学校に上がった後が切れてしまうんですね。ですので、同じような体系で、小学校に上がった以降の連携をどうするかということ、今

後かなり詰めていかなければならないし、年齢によって、貧困に対する観点というか、困りごとや深刻さが変わってくると思いますので、学校をどのような形で位置づけていくのか、有機的で実効性のある対応を取っていくのかということが今後の課題だと思います。あくまで一步前進だという評価の上ですが、是非ご検討いただければと思います。

今のご発言から、私の考えを述べました。他いかがでしょうか。

【山田委員】

ご報告ありがとうございました。道の2歳児の調査結果はまだ取りまとめ中でしたね。札幌市が先行して行った調査で、2歳児の親が特に相談先がないということだったり、立ち話す相手がいないという方の数がすごく多かったということが出ていたかと思うのですが、先ほど私が話をしました地域子育て支援拠点事業も、その基本事業の中に相談や情報提供や、親子の居場所の提供だったり、交流の促進であったり、講座とかそういうことが入っているのです、そこをしっかりと、道内でちゃんと役割を果たしているのかというところで、研修をしていくとか、そういうことが必要かなと思いました。

あと、それに付随して、国では利用者支援事業というものが出てきていて、敷居の低い場での情報提供や相談の対応だったりというものを目指してそういう事業が出来たのですが、なかなか道内ではその事業が進んでいないのかなという印象がありまして、そのあたりをちょっと強化されていったらいいかなと思いました。

そして、子どもの安全・安心ネットワーク推進事業ですが、私は資料の表をみて、こういった役割だというふうに皆さん承知されているのだなと思ったのですが、子育て支援センターというのはすごく古い名称でして、現在は地域子育て支援拠点事業という中の、センターが一般型という形で、今は児童館型というものも道内に増えてきておりますので、拠点事業と言うことで標記されたらどうかなと思いました。また、保育所・幼稚園のところ、今は認定こども園が子育て支援をその目的の一つとして数をどんどん広げていますので、その辺の所を、古い名称だったり古い役割分担にとらわれず、新しい保育の新制度による整理をされたらどうかなと思いました。

それから、先ほど松本会長がおっしゃっていた北海道にネグレクトの家庭が多いということがすごく気になっていて、なぜなのかというと、やはり経済的な問題がすごくからんでいるのかと思うのですが、ネグレクト家庭は本当に他府県と比べると、北海道はすごく多いですね。そのあたりがなぜなのかというところは、研究されていないとお聞きしているので、そこを平行してされていくということも大事なかなと思いました。

私からは以上です。

【松本会長】

2歳児の調査には私もちょっと関わっておりますが、2歳・5歳・小2・小5・中2・高2という風に年齢を設定して、色々と同じ質問をしているときに、立ち話をする相手がいな

いと答えている方が、2歳児の調査ですごく多いんですね。これは札幌市のデータで、北海道もそろそろ結果が出ると思うのですが、おそらく同じような状況ではないかと思います。

5歳以上は保育所や幼稚園など、どこかに関わっているのですが、2歳のところが、やはり制度のはざまに入っていて、どこも関わっていない。そのようなところがあるのではないかということが、いまのところの分析で、それを踏まえてのご発言かと思います。

制度が届きにくいような構図になっているところに、どのようにきちんと対応をしていくのかといった趣旨のご発言だったと思います。山田委員の発言にちょっと補足させていただきましたが、事務局から何かありますでしょうか。

【佐藤主幹】

山田委員のお話のとおり、はざまの無い、切れ目のない支援に繋げるという意味で、相談をする方がどの年齢層でも、どの段階であっても切れ目がないような、そういった仕組みづくりを続けていかなければならないのかなと考えております。

それから、北海道はネグレクトが多いとお話でしたが、やはり経済的な要因が影響している場合も少なくないと考えておりますので、今後、そのあたりについて留意していくことも大事かなと思います。

また、安全・安心ネットワークの表の名称につきましては、古い部分もあるかと思いますが、いずれにしても幅広い分野の方にご協力頂いて、支援することを考えております。

【松本会長】

他、いかがでしょうか。

【五嶋委員】

子どもの安全・安心ネットワーク推進事業についてですが、切れ目ない支援ということでしたが、「母子手帳交付」というところが、そもそも産婦人科に行った後ということになるので、産婦人科との連携ですとか、その後小児科に繋がっていくあたりの支援が手薄なのではないかなと、活動しながら感じていますので、こういったところも踏まえて欲しいです。

【松本委員】

他に関連したご意見があれば、まとめて出して頂いてからお答えしたいと思うのですがどうでしょうか。なければ、事務局からお願いします。

【佐藤主幹】

今お話ありましたとおり、本当に困っている方の中には、産婦人科にかかっていない方もいらっしゃるかと思いますので、そういったことも支援の一つの観点として考えていかなければならないと思います。

確かに妊産婦の方で、急に救急車で運ばれて、日常的に病院にかかっていないという方も、今社会的な問題として出ていますので、そういった方に支援を広げることも視野に入れていかなければならないと考えております。

【松本会長】

特に、いわゆる特定妊婦さんに焦点をあてた支援ということは、国レベルでも議論されておりまして、その中には母子ホームのような提案もあって、それは住居もセットになって飛び込み出産に関わるような、場合によっては悲劇的なことになるのをどう防ぐかといったことが、かなり議論されてきた段階かと思っておりますので、今後その辺が国レベルでも少し動いていくことも踏まえて、ぜひ計画の中に入れていくという、これは私からもお願いをしたいと思います。

後はいかがでしょうか。

【川島委員】

先ほど山田委員からもお話ありましたが、認定こども園には子育て相談に係る職員を置きなさいというのが最初でした。今は変わってきていますが、先ほどお話したように私は保育所も幼稚園もやっていて、その相談の状況というところが、どこにあてはまるのかわかりませんが、保育所の場合は非常に保護者からの相談が多いです。幼稚園はあまりありません。

これは、まあ色々な事情があるでしょうけれども、私の考えでは、やはり保育所の場合は、来る時間や帰る時間がばらばらだということもありまして、保護者の話し合いの場があまり時間的にないんですね。それに対して幼稚園の場合は、お母さん達同士がちょっと話をする機会があるということで、そういう意味では、非常に子育てについて悩むということについては、少し解消できるのかなと思います。

また、0・1・2歳児の場合は分かりませんが、3歳以上の就園率というのは、北海道でも98%くらいだと思うんですね。全国的にも99.4%などと言われてますから、北海道もそれくらいということは、やはり保育所や幼稚園の人たちが、どこに相談して良いか分からないというところがあるということであれば、園などの相談機能を少し活用してもらえればいいのかなど。そういった調査は今回しなかったのかどうかということをお聞きしたいと思います。

あとは最後のページで、こういうふうに地域で共生しましょうよということなのですが、行政枠に記載されている地域包括支援センターなどの老人の相談業務というものは、いろいろな意味でしっかり発信していて、私は旭川ですけれども、旭川の場合は11ヶ所が必ず市の広報誌に載ったりして地域の情報を網羅しておりますので、そういうことをもう少し発信していくべきではないかと思っております。

児童相談関係は窓口が非常に多くて、どこに行ったら良いのかわからないので、逆に絞っ

の方が良いのかなど。これは私の考えですけれども、多すぎて、どこに行っても何について相談したら良いのか、例えば特別支援の関係はどこに行けばいいのか、まったくわからない。

うちの子どもが障がいを持っていると言われても、行政のどこどこに行くと、どこどこに行きなさいといったことになりますから、そういうところも道の方から、振興局などに窓口を置いてもらえれば、もっと親が安心して相談をすることが出来るのではないか。場所、地域、そういったことをもう一度検討していただければなというふうに、ちょっと私なりに思いました。以上です。

【松本会長】

保育所や幼稚園などの相談機能をどのように考えるかということと、それに関連して調査をしているデータがあるかどうかということかと思いますが、どうでしょうか。

【花岡局長】

子どもの貧困に関しては、地域の中のいろいろな社会資源を使って、そこにセーフティネットという役割を持って頂くことが、見えない貧困というものを顕在化できる、そういう手段なのかなと思っております。その代表例として、先ほど保育所や幼稚園でのおやおや安心サポートシステム、これを使って貧困を顕在化させようということをやっているというようなお話をしましたが、山田委員からもありましたように、地域子育て支援拠点、こういった場所も十分に活用して、あらゆるところで、こういった取組が出来ればいいかなと思っております。

それから、相談の一元化・ワンストップ化というのは、先日のフォーラムでも出されていたテーマですけれども、基本的な児童相談というのは、児童福祉法も改正になりまして、市町村の役割と位置づけられ、都道府県はそれを専門的に支援するという役割が明確になっております。ただ、そういった所がまだ住民の皆様に理解されていないところもあるのかなと思いますので、そういった点は、これから私どもとしても周知を図っていきたいと考えております。

それから、子どもの相談に関しては、国もそうですけれども、子育て世代包括支援センターというものを設置して、妊娠期から医療と連携しながら、ここでワンストップ型の相談をしていこうという取組が進められておりまして、これはまだ、道内では途上でありますけれども、こういったものも全市町村に行き届くように、道としても働きかけを行っていきたいと考えております。

【松本会長】

それでは、そろそろ時間ですので、もし最後にどうしてもと言うご意見があれば手短かにどうぞ。

【五嶋委員】

先ほど川島委員からもお話があったように、たらい回しにされてしまったりいうところで私たち当事者としてお願いしたいのですが、窓口での対応で、私たちは何かしらのつまずきを感じることで、繋がらなくなっているということが多いというふうに感じております。

そういった窓口での対応について、相談員の会話ですとかそういったところでも、人材の育成・養成ということで動いて頂けると、とても嬉しいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

【松本会長】

川島委員も五嶋委員も、相談という窓口のところでの強化なり機能なり、あるいは相談員の技量というものも含めてのご発言だったかと思えます。道の計画でも、やはり相談支援を大きく入れているというところが、内閣府で出している枠組みを少し進めているようなところかと思えますので、ご意見はそれぞれ貴重なご意見かと思えますので、いろいろな形で反映をして頂ければと思います。

そろそろ時間となりましたので、この点については、ご報告を頂いて、いろいろとご意見を頂いたと言うことでよろしいでしょうか。まだ、どんどん進行するものでして、これからも機会を頂いてご意見を頂戴できればと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

それでは、予定していた議事は全て終了しましたので、事務局に進行をお返ししたいと思います。

閉 会

【丸山主幹】

松本会長及び委員の皆様、長時間にわたりましてお疲れ様でした。それでは、本審議会の閉会にあたりまして、辻副知事からご挨拶を申し上げます。

【辻副知事】

委員の皆様方におかれましては、長時間にわたり本当にありがとうございました。副知事の辻でございます。今、貧困問題に係る報告に対して、いろいろとご意見を頂いたところでございます。また、子ども達の未来づくりと言うことで、富田部会長におかれましては、若いお子さん達との情報交換といった中で、いろいろな提言が出てきたんだなと感心しているところです。

実は、私も家内が子育てサロンをやっておりまして、そういった中で、先ほどもお話があ

りましたが、いろいろな場面で親御さんから相談を受けるそうです。けれど、その相談に対して何も出来ない、分からない、聞いてあげるだけでいいのか、どうしたらいいだろうと色々悩みながらやっていて、私も話を聞いたりして、どこに窓口があるのか自分で調べたり探したりしているところです。

そういう意味では、本当に今、例えば貧困の問題については、そういうことがあるんだということを、もっと、地域がしっかりわかる事が大事ですし、その上で、みんなで対応策を考えるということも大切なのではないかと思います。

それと、なんとと言っても子どもの未来、これにつきましては、今年は北海道という名前がついて150年ということで、これを契機にまた未来へ、そして海外へということで、それを支えるのが若い子ども達だと私たちも位置づけているところです。

ただ、子ども達が途中で挫折してしまっはいけない、これを見守るのが私たちの責任でもありますし、何とか応援して、そして子どもとしては、あまり肩肘を張らなくても生きていけるような、そんな北海道になっていければなと思っております。

今日は、若者の保育士体験というお話もありましたが、先ほど川島委員からもお話がありましたように、小さい頃は保育士を目指してというふうに、子ども達が目を輝かして言っている、だんだん子どもが嫌いだという話とか、保育士の待遇が悪い、そういう先入観もあるのだらうと思うのですが、どうも子どもの頃の思いがなくなっていく、それがちょっと残念だなと思います。そうならないように私達も頑張っていかなければならないと思うところでもあります。

子育て支援の取組も、本当に緒に就いたばかりで、新しい取組をどうやっていくか、また、貧困対策につきましては、ネットワークづくり、これをしっかりやらないとだめだというふうに思います。

今回のご提言につきましては、知事に上申するということになると思いますが、今後とも、委員の皆様方には、こうした北海道の子どもの未来づくりについて、ご意見、またご支援を賜ればと思います。本日は、本当にありがとうございました。

【丸山主幹】

以上をもちまして、「平成29年度第2回北海道子どもの未来づくり審議会」を終了させていただきます。委員の皆様、ありがとうございました。